

令和6年度 幼児教育研修（年齢別担任研修4歳児・第3回）

「4歳児の子どもの発達と保育者のかかわりについて」

～葛藤して仲間と育つ4歳児保育で大切にしたいこと～

日時：令和6年10月22日（火）15:00～17:00

会場：足立区勤労福祉会館

講師：東洋英和女学院大学 教授 塩崎 美穂 氏



事例から、「倫理観」が育つ4歳児の「心の動き」や「友達との関わり」について、学びました。

A保育園の動画1

3歳児クラスの時からカブトムシを育てている。夏の間、カブトムシを観察したり触って遊んだりしていた。カブトムシはいなくなり、今度は土の中に卵があるのかもしれないと探すことになった。

7月の姿



押し合いになり、皆で見えるように話し合う

10月の姿

ほら！ほら！卵あった



カブトムシの羽もあった

入れ替わり立ち代わり、好きなペースで参加している

「生き物」との出会いは、子どもの中の何かを変える

《担任より》

子どもたちが、見つけた卵を透明の飼育ケースに入れた。

子どもたちは、飼育ケースにぶつからないように気を付けている姿があった。



塩崎先生

卵を探す時、タライの中をかき回していた子どもたちが、そっとしておいてあげないといけないと思っている。卵に対して、自分以外からの刺激を極力避けたい気持ちが育っている。

1, 2歳のころは、手にした虫を握りつぶしてしまうことが多い。

3歳児は、身体のどこかで「自分と同じ生き物としての虫の命」を感じ始める時期である。

事例1【えいたくんの葛藤】



虫の好きなえいたくんは、コオロギの世話をしている。

5歳児がやってきて、カマキリのエサにするために一匹ほしいと言われ・・・。

今度バッタ取ったら、エサに
してもらってもいいけど...

えいたくん

どうしよう。
かわいそうなんだけど...

なんか、わかんなくなっちゃった

揺れ動く心

コオロギをとるかカマキリをとるか、「5歳の要求にこたえるか」「自分の大事なものを守るか」

要求を出す

最後の最後まで「あかちゃんはだめ!」「大きいものにして!」

考え抜く

“あげたくない” “あげないといけない”



上記の事例を参考に、各園での“子どもが葛藤しながら発言したこと”について、グループで話し合いました。

～その声はどんな風に聴きとられましたか？実現されたことはありましたか？～

自分が苦手としていることを、保育者の言葉がけや友達の姿から、自分でどうすべきか考え、“今は、やらないけど明日やる”というような姿があり、**心の動きがみえた**というエピソードがあった。また、“明日やる”と決めた能動的な姿からは、4歳児の**（規範）ルールが作られていく時期**なのだと感じたという意見も出された。



A保育園の動画2

男児はいつも一人で、積み木とレールを組み合わせた、「玉転がし」の遊びをじっくりと楽しんでいる。いつものように遊んでいると、女児2名が遊びに加わり、3人の世界を楽しんでいた。

担任の先生に
聞いてみた



塩崎先生

Q 何で女児2名は、玉転がしの遊びに入ってきたのだと思う？

男児が一人で並べているのを見て、楽しそうに思ったから。

Q ハードルの高い遊びだったとしたら、入ってこなかった？

そうかもしれない。でも、どうかな？

Q 男児が女児を仲間に入れてあげたのは何故？嫌じゃなかったの？

女児たちとは、普段一緒に居ることがあまりない。いつもは、誰かに入って来てほしくないタイプだが、この日は積み木が崩れても「直すよ」と言っていた。嫌じゃなかったと思う。



担任



塩崎先生

子どもたちの中で、何かがピタっとはまった!!
“心を許せる瞬間” “いいねを重ねた時間” を共有している

ファンタジーとリアル

4歳児クラスは「探究あそび」が面白い!

冒険あそび

知識や身体的技能の限界を乗り越えて、未挑戦の場所に踏み込んでみようとする。

探検あそび

目に見える世界の陰に隠れている何かを想像し、それを対象とする



園の近くに「りゅう」が
いるらしいよ

「もりのへなそうる」

わたなべ しげお さく
やまわき ゆりこ え
出版社 福音館書店

「エルマーになった子どもたち」

ルース・スタイルス・ガネット さく
ルース・クリスマン・ガネット え
わたなべ しげお やく
出版社 福音館書店

好奇心をくすぐられ、「真実」かどうかを自分たちで確かめてみたくなる
この情熱が「探検」への原動力となる

研修生の報告書より

4歳児は葛藤や揺れを感じながら生活していることを理解しながら保育をしてきたが、今回の研修を受けてより子どもたちの気持ちを知るととても良い時間となった。

特に虫に関わる映像では、子どもたち同士の関わりやその場面に対する保育者の関わり方を学び、自分の保育の仕方を見直す機会となった。

他園の先生方と子どもたちの葛藤について話し合えたことで、子どもが嫌だけど何とかしなければならぬ場面や貸す貸さない、入れる入れない問題など日々多くの葛藤をしながら生活している姿が見えてきた。

保育者は子どもの「葛藤」や「揺れ」を共に悩みながら保育者主導でまとめないこと、保育者のおもしろがり方が大切とのことを学んだ。

「探索あそび」の経験が、子どもたちの想像力をより一層喚起し、子どもたちの共同性も育まれていくことを知った。クラスでは、友達と遊ぶ中で自分のアイディアを出し合い、「いいね」を共感したり喜び合ったりしている。保育者もその楽しさやぶつかり合いの場なども共感しながら関わっていきたいと感じた。

4歳児という時期は、価値観が形成されていく重要な時期であると学びがさらに深まった。多様性のあり方や民主的な関係を様々な経験を通して学ぶことが、今後の育ちにおいて大きな意味をもっていると感じた。子どもたちが自分の思いで環境や遊びのルールをおもしろくなるように変えたり、過ごしやすくしたりする経験ができるように働きかけていきたいと思った。